

平成二十四年十二月十日発行
皇學館論叢第四十五卷第六号 抜刷

紹介

『伊勢市史』第六卷考古編

堀田啓一

『伊勢市史』第六卷考古編

皇學館論叢 第四十五卷第十六号
平成二十四年十二月十日

堀田啓一

B5版、タテ上下二段組、口絵全カラーで十六頁、本文八二〇頁あり、裏表紙にコンパクト・ディスクと、付録に「遺跡分布図」（二万五千分の二）と「高倉山古墳石室実測図」（八十分の一）がついている。

本編の部会長たる岡田 登氏は第一章から第五章（第四章特論遺跡を除いて）まで大部分を執筆編集するという大役を果たしている。丸背で紺色の綺麗な布製装丁に金字の「伊勢市史第六卷 考古編」の背文字が入り、上品で高級感をもたせている。一般的にみて県史や市町村史は、A5版の小型のものが多くが、図面や写真の多い考古学的遺跡・遺構・遺物の性格上、B5版という大版サイズを採用した。これは本書を活用する読者に対する配慮を、大いに感ぜざるをえない。

次いで、目次に従いながらその内容について、一瞥しておきたいと思う。前述した如く、第一章から第五章までと考古関係文献一覧、あとがき、考古編協力者一覧、執筆者及び担当分野、市史編さん関係者の見出しとなっている。第一章調査・研究史は、第一節発見・発掘と第二節分布調査と遺跡地図、第三節発掘調査は立会い調査を含め、昭和三十五年から平成二十年三月まで一五〇遺跡の一覧表がつけられている。第四節市史編さんにもなう調査では、旧伊勢市内所在の遺跡数が北浜地区から豊浜、城田、中島、宮本、沼木、大湊、神社、有縄、厚生、早修、明倫、修道、進修、浜郷、四郷地区の十六地区内に四五八遺跡の所在が確認されている。この遺跡のうち最も多いのは、古墳時代で一四二遺跡があり三十一%を占めている。第五節は

今後の課題として、重要遺跡をはじめとして、その他諸遺跡出土・採集された考古遺物を、市の管理のもと一括した保存や管理、展示などを通じた活用への必要性。第二に内宮の鎮座する宇治、外宮の鎮座する山田など市街化された地や神宮々域内出土遺物の紹介、今後宮域内の考古学的調査の必要性を説いている。

第二章は時代別概観として第一節旧石器時代から第二節縄文時代、第三節弥生時代と第四節古墳時代、第五節古代と第六節中世と第七節近世に分けて概観している。

まず旧石器時代は約二万年から一・二万年前、後期旧石器時代からで指標石器として、ナイフ形石器を主とする時代から槍先形尖頭器を伴う時代を経て細石刃・細石核の出現時代へ移行する。市内での旧石器から縄文章創期の遺跡は十一ヶ所あり、その中で多くの遺物が出土しキャンプ地として注目されるのは、宮川中流右岸に所在する津村町元新田遺跡がある。採集のナイフ形石器は二から三種の小型品で、東海から関東地方に見られる茂呂型のものが多くチャート製を主とするが、サヌカイト製の横長剥片を利用した畿内系技法もあることが注目される。

第二節の縄文時代は一・二万年から二・四百年前の地球温暖化時代を迎える。環境の変化は人類定住生活を可能にし、人口の増加も相まって市内の遺跡も増加して八〇ヶ所を数える。そのうち土器の採集されたのは二〇ヶ所、時期比定が可能な遺跡

は十四ヶ所である。草創期一遺跡（中村町桶子）、早期三遺跡（磯町大藪、今在家大床谷D、辻久留万所）、前期一遺跡（大津野A）、中期三遺跡（藤波、ハノカ、オゴ山）、後期四遺跡（藤波、莊司端、元新田、中ノ垣内）、晩期三遺跡（藤波、小御堂前、大藪）があげられる。これらの遺跡の中で、注目されるのは佐八藤波遺跡であり、縄文中期から後晩期へと約二千年の長期にわたり継続した注目すべき遺跡である。特に本書第四章の特論遺跡の第一節で取り上げ、田村陽一氏が四七頁の大部にわたり、豊富な土器拓本や石器等の実測図、写真などそそえてこの遺跡のもつ重要性を發表している。数点ではあるが弥生土器も出土する。

第三節の弥生時代では、紀元前四世紀から紀元後三世紀中頃まで約七百年間とみて、近年の弥生時代の開始をさかのぼらせる見解をとっている。この紀元前四世紀早期の遺跡は未確認で、本書紹介の弥生時代の遺跡は前期四ヶ所、中期一ヶ所、後期二五ヶ所の計三六ヶ所である。その中で五十鈴川中流域の弥生後期中村桶子遺跡から銅鐸片の採集、宮後遺跡（前・中・後期の土器）、低段丘の月読宮遺跡（後期の土器）や中村遺跡（中・後期の土器）が新たに確認された。このことは従来の皇大神宮（内宮）に、六世紀後半以前に天照大神が祀られた遺跡はなく、未開の土地であったという説が覆されることになっ

た。それ故、五十鈴川流域の内宮創始について、筆者の岡田氏は私見ではあるがとして、三世紀末頃と考える注目すべき見解を述べておられる。また、後期の堅穴住居址や方形周溝墓など、勢田川流域を含め外宮創始に関しても、定住生活の確認できる遺跡が存在する。

第四節の古墳時代では南勢地域の榑田川流域は、松阪市宝塚古墳群や権現山、高塚、神前山古墳など支配者層の奥津城が、宮川流域では川筋を中心とする限定小地域の支配者層の古墳群が存在する。その中で赤土山古墳群は、六世紀前半築造の連接する一辺十米程の方墳二基が調査された。その成果は第四章第二節で詳説されるが、東の一号は盗掘にあり、西二号墳は箱式石棺を内部構造に、周溝内で円筒埴輪列と立派な形象埴輪(馬・人物巫女・家形など)が出土している。

また六世紀後半頃、外宮裏山に巨大な横穴式石室(全長全国七位、玄室長全国一位で面積は二位)、高倉山古墳が調査され、七世紀初頭に追葬された伊勢地方に絶対勢力をもった度会氏の築造したものと推定された。古墳の重要性から第四章第三節に、特論遺跡として取り上げ付編一には土生田純之氏の横穴式石室の考察を、付編二には奥田尚氏による石材とその採石地の考察をのせ内容を充実させている。

第五節の古代では大化以降、伊勢国では神宮の創始以来有ル

『伊勢市史』第六卷考古編(堀田)

の鳥墓とがに神庖かみだを置き、神国と称して評を設け大化五年(六四九)に十郷を分け、度会の山田原に屯倉を、竹村に屯倉を置いて度会評と多気評の二評に分ける。奈良時代の官衙遺跡として沼木郷高河原に離宮院が、度会郡衙が山田原の屯倉地に存在したであろうが、今後の想定地域の第五章の試掘調査遺跡の増加を待たねばならない。

第六節の中世から第七節の近世にかけては、神仏習合思想の定着と発展により、神宮祭祀のみならず氏寺と経塚遺跡の出現が注目されるのである。その中でも第四章の特論遺跡で取り上げられた、第四節の小町塚経塚(浦口町)と第五節朝熊山経塚(朝熊町金剛證寺)が有名である。前者の小町塚経塚は全国有数の経塚で、神宮神主たる大宮司の大中臣氏、内宮禰宜の荒木田氏、外宮禰宜の度会氏が仏教信仰ともどうかかわったかが解明できる貴重な資料である。

発掘調査のなされた朝熊山経塚は、伊勢市東南の標高五五四米霊峰朝熊山の山頂峰から東斜面、金剛證寺裏の標高五四二米経ヶ峰という東西南北の展望できる絶景の地に所在する。経塚の分布は南北二二米、東西一四米の範囲に総数四三基が確認され、外部構造は二、三米の方形や長方形の石組囲いが、内部構造は土壙、石囲み、小石室、瓦囲いの中に銅製経筒六基と陶製経筒五六個が検出されている。造営年代は陶製経筒の銘文よ

り、保元元年（一一五六）から文治二年（一一八五）の二九年間である。

近世の徳川政権下の江戸時代は宗教都市宇治と山田、商業都市河崎、港湾都市大湊の町々は現在の市街地と重複し、条件の良い試掘調査でしか検出できない。第五章試掘調査遺跡では七ヶ所で実施され、最下層が室町期で、その上に近世にかけ数層の整地と火災層が認められ、北海道から鹿児島まで御師の活躍により伊勢信仰の流行で、宿泊家や寺院など宇治と山田に数多く集中して存在していた。

第三章遺跡概観は本文の八二〇頁中、四六九頁を占め約五七・二%と本書の大半を構成している。遺跡分布図の遺跡番号と本章の遺跡番号が一致し、両者の活用方法をより便利になるよう配慮がなされている。第一節北浜地区の一番遺跡から第十六節四郷地区三七八番上條塚遺跡まで、内容の明らかな遺跡では位置と環境、豊富な遺構や出土遺物の実測図表と写真、伊勢両大神宮（内・外宮）の鎮座地の重要性を具現した圧巻章といえる。

我田引水になるが、皇大神宮の式年遷宮を迎える時、第十二節明倫地区豊川二三七豊受宮宮域内、第十四節進修地区二五七皇大神宮宮域内の出土遺物等が注目される。前者の出土遺物は鈴木敏雄氏と井上頼文氏らによる採集遺物の図表では、弥生末

から古墳初期を含む四点の土師器を始め、古墳時代の後期を中心に奈良時代に至る須恵器が多く、土師器では甗の牛角把手が目につく。佐藤虎雄氏の「神宮の土器」でも、より多くが須恵器で、平安後期から鎌倉期の灰釉陶器や山茶碗片が若干みられる。

後者の宇治館町皇大神宮宮域内からも、外宮宮域内と同じく鈴木・井上両氏の採集された土師器に須恵器、平安末の山茶碗と土師器、鎌倉時代の陶器や土師器類が採集されている。また、古墳時代の祭祀遺物滑石製模造品（劍菱形石製品、双孔円盤、勾玉、白玉八一点等）が、荒祭宮北方大山祇神社後林で採集され、神路山より白玉・円板・馬具留金具・三鈴香葉が出土している。

わが国の精神的支柱である神道の歴史的背景を、内宮と外宮という二宮が鎮座する当地に、『伊勢市史』という全八巻中の第三回配本として第六巻考古編が平成三三年三月伊勢市より発行された。遺跡・遺構・遺物を中心に多くの図表、写真等を駆使して当地を考古学的に集大成した圧巻である。編著者たる岡田登氏の学識をはじめ、本書にかけた御尽力に対し敬意を表したい。

（ほりた・けいいち

奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員）